2022. 6. 10
No.229

編集・発行人　樋口みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送年間2,000円）

スプリングエフェメラルから初夏へ

野山の自然の息吹に励まされて

夫が、8ヶ月間（2つの病院）の入院生活を終えて5月24日に退院しました。

北海道は例年にない豪雪でしたが雪解けと共に一気に咲いた野山の花や自然の息吹に感動しました。「空の鳥を見よ、野の花を見よ」を写真で伝えます。

4.28 宮島沼でシベリアに向かう7万羽のマガンがひと休みしていました。樺戸山塊の残雪が美しくマガンも気持ちよさそうですね。この壮観な飛翔に私も心が躍りました。

4.28 浦臼神社のカタクリとエゾエンゴサクの群生に心が洗われました。スプリングエフェメラル（春の妖精）と呼ばれる早春の花々です。カタクリは可憐な美しさとはかなさが、人を惹きつけます。今年も会えて嬉しかったです。

4.22 ビルの谷間にキタコブシが力強く咲きました。いつもは野幌森林公園で見るのですが、この花が咲くと農家の仕事が始まりますね。

4,28 宮島沼で輝くように咲いていたエゾノリュウキンカ。花ことばは「必ず来る幸福」。たまたま入った湿地帯に咲いていて元気づけられました。

5.10 江別市内で。緑色の花びらが美しい御衣黄桜（ぎょいこうざくら）が咲きました。花ことばは「永遠の愛」です。

5.18 自宅近くで咲いたスズラン。日高生まれの私は子どもの頃、道端に群生したスズランの可愛らしさと清楚さがとても好きでした。

5.24 夫の退院を祝うように自宅庭の天文台のそばで、ヒメリンゴの花が満開になりました。「明日のことは思い悩むな」と教えてくれました。

対話で平和を

スタンディングで初めてスピーチ

私は個人で「環境、平和、人権」を基調にした通信を発行しています。

ウクライナ侵攻1ヶ月が過ぎました。マリウポリへの砲撃で電気、インターネット、水道、ガスなどのライフラインが止まりました。1000人が避難していた劇場や産科の病院も攻撃されました。ウクライナでは121人の子どもが死亡し、167人がケガをしました。（3月23日現在）今はもっと増えていると思います。あまりにも惨たらしく、未来を奪われた子どもたちの「助けて！」という叫びが聞こえるようです。

3,27 札幌駅前のウクライナ侵攻に反対するスタンディングで発言するみな子　奥田聡さん撮影

プーチン大統領は報道統制を強化して、政府の意に添わないニュースは認めません。報道の自由が奪われ、ロシア市民の声が届かなければナチスと同じになってしまいます。

ロシアは侵略開始と同時にチェルノブイリ原発を占拠。さらに欧州で最大規模のザポロジエ原発を攻撃しました。広島、長崎に核爆弾を落とされた被爆国として断じて許せません。私はチェルノブイリ原発事故後、原発反対の運動に関わりましたが11年前に福島原発事故を経験し、泊原発の廃炉をめざす会で原発をなくそうと運動しています。世界中で起きた戦争で、普通に暮らす多くの市民が犠牲になりました。その体験を通して、誰もが平等に平和に生きる権利を守ろうと決めたのではありませんか。

私は2014年にポーランドにあるアウシュビッツ博物館を訪れました。ドイツの学生がボランティアで博物館の外を清掃しながら、「ユダヤ人に対してナチスドイツがした残虐な殺人は二度とあってはならない」と学ぶ姿を忘れません。

元ソ連大統領で財団総裁のミハイル・ゴルバチョフさんは現在91歳。米ソ冷戦を終結に導き、ノーベル平和賞を受賞しました。「世界には人間の命より大切なものはなく、あるはずもない。相互の尊重と、双方の利益の考慮に基づいた交渉と対話のみが、最も深刻な対立や問題を解決できる唯一の方法だ。我々は、交渉プロセスの再開に向けたあらゆる努力を支持する」と述べました。私も同感です。

美しい街並みが砲撃で無残に破壊され、食べ物もなく、多くの市民も殺されました。ニュースでウクライナの女性が「子どもが殺されている。非道だ」と訴えていました。戦争によって、平和、人権・環境を奪われるのだと実感しました。

戦争反対！一日も早く戦争をやめてください。

（3月27日スピーチ・樋口みな子）

北海道の登山文化を発信

ロバートさんの講演を聴いて

３月１９日「山のトイレを考える会」で講演するロバート・トムソンさん：山のトイレを考える会提供

コロナ禍で登山の回数はかなり減りました。それでも「山のトイレを考える会」の立ち上げの時からの会員です。2000年6月に「山の自然を守ろう」と山を愛する人たちで活動を始めました。

3月19日にこの会の総会で、ニュージーランドから北海道に住んで10年のロバート・トムソンさんの講演を聴きました。

大学の講師をしながら、アウトドアルート情報を英語で紹介しています。きっかけはイギリス人の2人連れにロバートさんと友人が、富良野岳から下山中に「十勝岳温泉にはどう行けばいいか」と聞かれたことだったと語りました。「2人は雨で濡れた手書きの地図しか持っていなかった。まともな情報なしで登山する外国人が多いのではないか」と自分の出来ることがあると考えたと語りました。

ロバートさんは海外からの登山者に、英語表記の地形図を無償で提供し、北海道の登山文化を発信しています。山のトイレ問題についても実践して感じたことや提言には、私たちには気がつかないことも多かったです。トイレや山小屋がもっと快適にならなければと提言しました。携帯トイレの普及にはトイレブースがあちこちの山域にあるといいですね。さすがに自然保護を国の政策としているニュージーランド人だなぁと思いました。

20数年前、ニュージーランドには息子が小学生の時、家族3人で春休みに行き、マウント・クックの秀峰に感激しました。自然保護官が豊かな自然を守っていて、ごみひとつなく、その上安心して、トレッキングを楽しむことが出来ました。このトレッキングだけはツアーにはなく、私たちで計画しました。日本からマウント・クックがあるホテルに夫が英語で電話して予約しました。満天の星に感動しました。ニュージーランドの人々の温かさも嬉しかったです。

ロバートさんの講演は、ニュージーランドの自然を大事にする気持ちを北海道の自然を守ることにつなげているのが伝わりました。日本語も堪能で、いまさらですが、私も英語を学びたいと思いました。

21年間の山トイレ活動の歴史も小枝正人さん、仲俣善雄さんの報告から理解出来ました。

泊原発の運転差し止め

津波に対する安全性欠くと札幌地裁

地裁前で判決に喜ぶ原告団のみなさん：及川文さん撮影

北海道電力泊原発の運転差し止め訴訟で、札幌地裁は5月31日、運転をしてはならないと命じました。

私は2011年、「泊原発の廃炉をめざす会」の立ち上げの時から、全道各地からの原告募集などで関わりました。家族が退院したばかりで、共に頑張った仲間と喜びを分かち合えなかったのが残念です。

事務局長を1年、ハイロニュースの編集を2018年5月まで担当しました。一番苦労したのは原告になってくださった方をひとりも漏らさずに登録することでした。

以下、朝日新聞からの転載です。

判決後の会見で、原告弁護団長の市川守弘弁護士は「極めてわかりやすく、順当な判決。危険性を理由に、再稼働を止めたかった我々の思いに寄り添ってくれた」「これ以上待てない、と裁判所が規制委の代わりに判断してくれた」と指摘。「規制委の審査を理由に、裁判所が先に進めようとしない『塩漬け裁判』が全国にあるが、安全性が立証できなければ結審して判決を出してもいい」と述べ他の訴訟に与える影響は大きいとした。

原告団を牽引してきた小野有五・北海道大学名誉教授（自然地理学）は「1200人の仲間がいて10年間がんばってこられた。裁判官が厳しく指摘してくれた」と笑顔を見せた一方、北電側の姿勢を改めて批判。「北電が規制委の方ばかり向いていたということが問題。規制委に対しても証拠の出し方が遅かった。北電は原発のような危険なものを扱う能力がそもそもないんじゃないかとさえ思う」と話した。

原告団長の斉藤武一さん（69）＝北海道岩内町＝は「団長として道民として、地元の人間として喜びたい。差し止めは、どんどん再稼働が遅れるということ。原発のない北海道を目指す第一歩が、（判決があった）午後3時に記された」と声を弾ませた。（記事は角拓哉さん、石垣明真さん、日浦統さん）

2014年11月5日、大飯原発訴訟の控訴審が金沢であり、私は泊廃炉をめざす会として参加しました。その時に知り合った大飯原発原告団代表の中嶌哲演さんは泊原発の運転差し止めに「少しずつだが住民の命を大事にする判決が積み上がってきた。自分たちも力づけられる」とコメントしました。

リカバリーと対話は友だち

クッキングハウス会の総会と講演に参加して

5.21対話の大切さを語る左から中西万依さんと母の水野スウさん、代表の松浦幸子さん　水野スウさん写真提供

5月21日、調布にあるクッキングハウス会の総会と記念講演「リカバリーと対話は友だち」に参加しました。クッキングハウスは安心して自分らしさを取り戻せる場所です。心に病気があっても地域で豊かに暮らせる居場所にと35年間も活動してきました。

代表の松浦幸子さんの著書を読んで感銘を受けて会員になって20年近くになります。

今年の総会の記念講演は、水野スウさんと娘中西万依さんの対話でした。石川県に住むスウさんとは「いのみら通信」を30年以上も読み続けてきて、久しぶりにお目にかかりたいと参加しました。万依さんは仕事に集中しすぎて倒れました。

万依さんは東京在住です。パートナーの機転で大学病院にたどり着き、奇蹟的に後遺症もなく回復しました。夫の病状と重なり胸が痛くなりました。その後、万依さんはクッキングハウスのSST（ソーシャルスキル・トレーニング）やメンタルヘルス市民大学で学び、リカバリーについて考え、発見した感動をスウさんに語ってきたそうです。総会でたっぷり聴かせて頂きました。万依さんの表現力に感動しました。感想を話すメンバーさんたちの聴く力も素晴らしいです。

会報の「クッキングハウスからこんにちは」に「自分の気持ちを話してみること」「気持ちを十分に聴くこと」の相互作用を何度も繰り返すことにより、どういう人生を送りたいのか、希望への気づきにつながっていくと、その実践を紙面で伝えてきました。

私は前日まで、夫の退院の準備で、部屋の片付けや、ケアマネージャーさんらとの打合せなどで総会も忘れかけそうでした。当日は、40人分の軽食やコーヒーなどの準備をスタッフだけでなくボランティアの方たちが心を込めて準備する姿に心が温まりました。久しぶりに語り合う楽しさと豊かさに浸りました。

松浦さんは会報で「フィンランドの精神科医療も『オープンダイアローグ』で回復につなげてきた歴史を積み重ね、希望をもたらしてくれました。世界中の紛争や戦争、憎しみ合いの報復も必死に対話のできる条件を探し整えていく努力をしていってほしい。私達のこの小さな居場所から、対話があってこそ、リカバリーへの道が歩めたことを伝えていきたい」と結んでいます。（みな子）

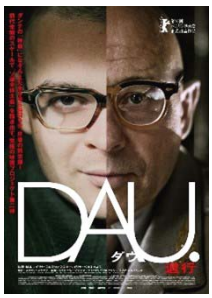
映画『DAU.ナターシャ』『DAU.退行』と天才物理学者ランダウの生涯

Ⅰ.映画の概要　　リュミエール池

DAUとはソ連最高の科学者でノーベル賞物理学者ランダウの愛称だ。DAUシリーズは彼の波乱に満ち、スターリンによる粛清を生き抜いた生涯を描く映画となるはずだったが実際には主要キャスト400人、全14作の「史上最も狂った映画」が出来上がった。本シリーズは、ロシアでは上映禁止である。

Ⅰ-1『DAU.　ナターシャ』：2021年ベルリン映画祭銀熊賞

1952年、ウクライナのハリコフにある秘密研究所では、多くの科学者たちが軍事的な研究を続けていた。施設内の食堂ではウェイトレスのナターシャらが働いていた。ナターシャは、研究所に滞在していたフランス人科学者リュックと惹かれ合い肉体関係を結ぶ。だが、当局から呼び出された彼女は、冷酷な KGB 職員アレッポからスパイ容疑のため厳しい追及と人間の尊厳を失うような執拗な攻撃を受ける。



[左写真]ナターシャ(左)とリュック、オリガ　[右写真]マクシム(左)とウラジーミル・アレッポ

Ⅰ-2.『DAU.　退行』：狂気の物語(6時間9分)

10年後、ランダウを名誉研究者とするこの研究所では「超人」を作る狂気の優生主義実験が行われていた。フルショフ時代、キューバ危機を経て、スターリンが築き上げた宗教的ともいえる、強い共産主義・全体主義社会は崩れ始め、徹底的に管理されていた体制と風紀は乱れてきた。上層部は腐敗を正すためにKGBのアレッポを派遣し、所長に辞任を迫らせる。自ら新所長に収まったアレッポは、マクシムをリーダー格とする全体主義かつ暴力肯定・極右の過激派グループの若者達と手を結び、量子物理学者及び科学哲学者らのグループを支配していく。なお、アレッポ役は元KGBの捜査官、マクシム役は元ネオナチの活動家で、その迫力は半端ではない。

Ⅱ.　映画の背景とランダウ

Ⅱ-1.　ランダウの業績

ランダウの業績は物理学全般に渡り、南部、小林、益川各博士のノーベル賞に繋がる対称性の破れの初期研究も含まれる。液体ヘリウムが絶対零度に近い極低温では容器から勝手に流出してしまう現象を超流動と呼ぶが、そのメカニズムを明らかにした業績に対しノーベル賞が授与された。

Ⅱ-2.　囚人としてのランダウ

ランダウは量子力学の開祖ニールス・ボーアに師事し、その後ケンブリッジ大学で先輩カピッツァとともに反磁性に関する業績を上げた。この留学経験がランダウを自由主義的な人間に変えていった。映画と違い、ランダウがハリコフで過ごしたのは1932-1937年の5年間である。1934年、ハリコフ研究所は、研究を軍事的・応用的なものに再編する指令を出し、新所長を迎えた。ランダウは純粋科学を守ろうと必死に闘かったが、スターリン批判の罪を問われ1938年、投獄された。ランダウを救ったのは反骨の科学者カピッツァだった。彼は酸素製造の新技術を発明したため政府と極めて良好な関係を得ており、物理学者を救う活動を続けた。加えて、ランダウがすでに国際的にも評価されていたことも彼を長期刑から救い、1939年彼は釈放された。

Ⅱ-3.　ランダウと水爆

ランダウは原水爆には反対していたがスターリンの命令に逆らえる状況にはなく、恐らく自然界の謎を解かずにはいられないランダウの気質がそれに輪をかけたのだろう。アメリカでも解明されていなかった水爆の発生するエネルギーを算出する方法を見出してしまい、皮肉にも彼はその業績に対しスターリン賞を2度受賞した。スターリンの没後、彼は水爆の仕事を止め、レーニンをも批判するようになった。ランダウは、『動物農場』を書いたジョージ・オーウェル同様、民主社会主義者だった。

Ⅱ-4.　教育者としてのランダウ

ランダウは教育者としても優れていた。彼は厳しかった一方で、「理論ミニマム」を設定し、1933～61年の合格者43名に対し極めて面倒見が良く、彼らはいずれも優れた物理学者となっていった。ランダウを救った勇気ある人、カピッツァはヘリウムの超流動の発見者として、また他に弟子から2名、本人も含め「ランダウ学派」から4人のノーベル物理学賞受賞者が誕生した。弟子のリフシッツとの共著『理論物理学教程』は筆者には高嶺の花だったが、1960～90年代における最高の教科書だった。

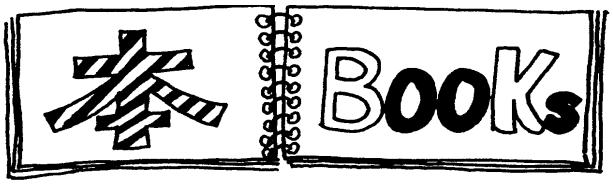
Ⅱ-5.ランダウの悲劇と言論の自由、ウクライナ問題

ランダウ(1958)

映画では彼はボケ老人のような姿で登場するが、実際には1962年、ランダウは交通事故で瀕死の重傷を負った。天才を救うべく世界各地の優秀な医者による必死の治療が続けられ、彼の生命力が4回の危篤を乗り越えさせた。その様子は世界に報道され、大きな感動を呼んだ。ランダウの多大な業績に対し、その年末にノーベル物理学賞が授与されたが、彼は理論研究の再開に至らず、6年後の1968年、60歳でこの世を去った。

ランダウの悲劇はウクライナの悲劇と重なる。スターリンは『カラマーゾフの兄弟』における「大審問官」に酷似し、1932～1933年、穀物を輸出専用としたための人為的大飢饉であるホロドモールを引き起こした。餓死者数百万人、粛清された研究者は3千人以上に達した。ロシアのプーチン大統領も、スターリンとは程度の差こそあれ、大審問官

タイプの政治家であり、いつか今回のウクライナ侵攻のような事態を招くのではないかと懸念されてきた。映画『DAU』シリーズはフィクションだが、本作のようなことがありえたこと、その狂気と情報管理社会の恐怖に筆者は強い衝撃を受けた。2014年の特定秘密保護法の施行は、同年の親ロシア政権を倒した「マイダン革命」やその報復としての「クリミア侵攻」と無縁ではなく、守秘義務の壁は年々厳しさを増しつつある。また現時点では一部に過ぎないが、公共事業の得点制度による評価に、恣意的なものが現われ始めている。言論の自由のため闘ったランダウらに思いを寄せるとともに、一日も早いウクライナの停戦を願ってやまない。



本を読む時間があまりなく私は２冊だけの紹介です。読者の菅野真知子さん、植松心平さん、原田公久枝さんからご寄稿いただきました。とてもいい文章です。是非著書も読んで頂けたらと思います。（み）

少数者や先住民族との共生へのチャレンジ

教会教を越えて
ハウレット宣教師が北海道で見つけたもの

フロイド・ハウレット著　大倉一郎訳
日本キリスト今日団出版局　1,980円

本書は、戦後間もない北海道名寄にカナダ合同教会から派遣されたフロイド・ハウレット宣教師の自伝です。ハウレットさんは、2003年に天に帰られましたが昨年、大倉一郎さんの訳で出版されました。

ハウレット夫妻は、1951年に来日、2年間東京で日本語を学び、1953年に名寄にやってきて約30年間を過ごしました。ハウレット夫妻は、非キリスト者を「改宗」させるためではなく、「平和の架け橋」を目指しました。第二次世界大戦時、カナダも日系人を収容所へ送った歴史がありました。敵国だった日本との和解を望んだのです。

名寄には、厳しい寒さ、敗戦後の貧しい農民が待っていたのではないでしょうか。東京でさえ、「再建されず、教会は廃墟」と書かれています。彼らは、旭川以北に点在する、日本キリスト教団の教会の礼拝や聖書研究会、教会学校に協力するだけではなく、カナダから農機具や果樹、野菜の種を取り寄せ農業を始めました。1921年生まれのハウレットさんのお父さんは「開拓者」、お母さんは「看護宣教師」をめざした人で、彼女はのちに名寄に住むことになります。そして、地域の人々が抱える問題、困難に共に取り組み、「道北クリスチャンセンター」が創られました。

私は、道北クリスチャンセンターの存在は知っていました。「なぜ、名寄に？」「なぜ、農業や障がい者の問題を？」と思いながらニューズレターを眺めていました。少数者や先住民族との共生へのチャレンジに考えさせられていました。ハウレットさんが青年時代から教会の信条、教理よりイエスの教えに「究極的な優先性」を見出し、イエスの教えを実践したいと考えていたことの具体的なかたちだったのだと納得しました。日本のキリスト者、教会にも大きな問いとして今も投げかけられているのではないでしょうか。

ハウレットさん一家は、名寄から日本社会の問題を考え、行動しました。水俣や三里塚を訪ねています。千葉に住んでいる私には三里塚には特別な思いがあります。友人たちを案内したこともありました。デンマーク人夫妻を案内したときに、同じ時期、デンマークとスウェーデンの間の無人島に空港の計画があり、渡り鳥にとって重要な島だということで計画が取りやめになったのに、日本はなぜこの豊かな土地と反対する農民がいて強行するのかと聞かれ、本当に恥ずかしかったことを思い出します。ハウレットさんも、人間、農業（大地）が大切ではないのかと思われたに違いありません。名寄で、水俣の夏ミカンを共同購入していたこと、私たちも同じことをしていたのだと親しく思われました。名寄周辺では、ハウレットさんの持ち込んだ果樹や野菜が育てられています。

私は、大間原発建設差し止め訴訟の原告です。函館での集会で、「大間原発大間違い！」「マグロもイカも怒（いか）ってる！」と元気にシュプレヒコールするピーターさんをしばしばお見かけしました。ハウレット宣教師はピーターさんのお父さんでした。

今、私たちの周りに、さまざまな国籍、宗教、文化を持つ人たちが暮らしています。違いを学び合い、受け入れ合い、多様性がほんとうの豊かな社会を創り出すことを信じたいと思います。名寄での実践に勇気を与えられます。（菅野真知子）

文学の力というものが、輪郭を持って描き出されている

テヘランでロリータを読む

アーザル・ナフィーシー著
市川 恵里訳　　河出書房新社
1,672円

初めはタイトルに惹かれた。テヘランとロリータの組み合わせが不思議で面白い感じがしたのだ。しかし、実際に読んでみると、このタイトルは、奇をてらったものではなく、本書の内容を的確に表現した、動かしようのないものだった。

イラン出身の女性英文学者である著者は、圧政下に自宅で、密かに西洋文学の読書会を開く。学生たちとの日々を綴ったノンフィクションだ。1995年～1997年の当時、イランでは西洋文学が禁じられていた。だから、秘密の読書会になってしまうのだが、取り上げられる本は

ナボコフ『ロリータ』やオースティン『高慢と偏見』などだった。

素朴な疑問として、どうして世界文学全集に収められそうなこれらの本が発禁になるのかということがあった。イランにおける1979年のイスラム革命以後原理主義的なムスリム体制により、西洋的なものは徹底的に糾弾されるようになってしまったという実態が切々と述べられる。

著者らを抑圧するのは政治体制だけではない。イラン・イラク戦争によるテヘランへの空爆。さらに、法律によって支えられた逃げようのない女性差別。

投獄や処刑と隣り合わせにある、過酷な状況下で生き延びるために文学書を読む。比喩ではなく、文字通り生を懸けた読みによって、生きていく。そのとき、テヘランでの『ロリータ』は、男の夢を押し付けられて犠牲者となった自分達女性を描く作品であり、全体主義に抗するナボコフの声であると読まれたのである。著者は、「私たちの『ロリータ』にした」と書いている。

文学の力というものが、くっきりとして輪郭を持って描き出されている感動的な作品である。読むことは考えることであり、考えることは社会を見つめることである。そして、ぼくたちは、そのような営みを続けて生き延びていかなければならない。（植松心平）

暮らしを大切にして生きてきて見た風景に現代史を炙りだす

生きる場の思想と詩の日々

花崎皋平著　藤田印刷エクセレントブックス　3,630円

ノンノさんこと花崎皋平との付き合いは2009年7月15日に始まる。この本は1945年から2008年までの日記を基に書かれているので私と出会う前のことです。

出会った頃「ピロスマニの絵が見たいからグルジアに行ってきます」とそこら辺の美術館に出かけるかのように言われた時は（はぁ住む棚が違うんだなぁ）と思った。私は一緒に入った喫茶店で珈琲に付いている角砂糖を見ながら（貰えないかな?帰りに自転車をこいでかじりながら帰りたいな～）と考えていた。

私たちは文通で何でも話した。多い時は月に4通とか手紙を書いていたので、ほぼ日記をやりとりしていたようなものだ。中卒で正社員になる試験とか受けたこともない無学で無礼者だった私が、今ものを書いてそれが新聞に載ったりしているのは、辛抱強くいつも丁寧な返事を書き続けることで、私に書くということを伝えてくれたノンノさんのおかげだと思う。

そんなノンノさんが書いたこの本には、やっぱりすんごく勉強してきたんだなーとわかることばかり書いてある。まず読んでいる本の難しそうなことと、その量！とり憑かれてるのか？って位、本を読んでいる。それは今もそうでアマゾンで注文してどんどん本を買っている。家にはその辺の古本屋さんより本があって、眺めの良いリビングには、ソファの上だったりテーブルの上だったりに読みかけの本がいつも2～3冊はふせてある。しかも書生さんやお手伝いさんが居て、読むこと書くことに没頭しているんじゃなくて日々の生活を大切にしているところが凄い。掃除、洗濯、ご飯の支度から片付けに買い物、畑もやっていて、野の花を摘んできて花瓶にさして愛でている。旅も大好きでこの6月には一緒に京都に行くが、それ以外にも飛び回っている。

ノンノさんを見ていると、歳を取るってのも悪く無いのかもって思える。コロナ禍で死生観を考えざるを得ない昨今、この本を読んで“生きるとは”ということをじっくり考えてみてはいかがだろう。

（原田公久枝）昨年の北海道新聞・コラム「朝の食卓」執筆者です。

深刻な危機に陥っている報道の在り方を問う

何が記者を殺すのか　大阪発ドキュメンタリーの現場から

斉加尚代著　集英社新書　1,034円

沖縄の基地問題、教科書問題、ネット上でのバッシングなどのテーマに正面から取り組み、維新旋風吹き荒れる大阪の地で孤軍奮闘している斉加尚代さん。

本書は、毎日放送の制作番組『なぜペンをとるのか』『沖縄 さまよう木霊』『教育と愛国』『バッシング』などの問題作の取材舞台裏を明かし、ヘイトやデマが飛び交う日本社会に警鐘を鳴らし、深刻な危機に陥っている報道の在り方を問います。

今年5月公開のドキュメンタリー映画『教育と愛国』では映画初監督をつとめています。教科書検定を巡る長き取材を2時間弱の映像で世に問うています。ドキュメンタリーとは地道な取材の積み重ねであり、この本にもその制作の過程が詳述されています。

2010年に大阪維新の会が出来、政治主導の教育が進み、教育の自由も学問の自由も根本が崩されかけています。橋下徹大阪市長の「君が代斉唱問題」の囲み記者会見で、市長に質問を繰り返し、市長から「勉強不足！」「ふざけた取材すんなよ！」と、吊るし上げられた事件がありました。そのやり取りが動画で出回り、「反日記者」と斉加さんはネットでたたかれました。その苦しさは想像に絶します。政治家が煽ったとしか思えないです。それでも、萎縮しない斉加さんの勇気に圧倒されました。沖縄の基地反対運動も「基地反対派が患者を乗せた救急車を無理やり止めた」というデマによってバッシングが広がりました。

斉加さんは「私が思い描くドキュメンタリーは、どんな時代にあっても決して一色には染まらず、視聴者を信頼し、問いへの答えを託すものです。作品を通し、無関心であった社会の問題に思いを寄せる行動を起こしてくだされば、守るべき砦はきっと堅固になってゆくでしょう」「国家間の敵対関係や憎悪を煽る言動は危険だ。私が考えるジャーナリズムとは偏見や差別をなくしていく言論の取り組みだ」と述べています。

視聴者は観て応援しなければと思いました。

（みな子）

戦争の悲惨さと理不尽さを描く

同志少女よ、敵を撃て

逢坂　冬馬著　早川書房　　2,090円

書店で目に飛び込んだ過激なタイトルに腰が引けて買えませんでした。でも全国の書店員が選ぶ本屋大賞でのスピーチで「戦争に反対し、平和構築のために努力します」と述べたと新聞記事で知り、読んだのが本書です。

2月にロシアによるウクライナ侵攻が始まり、戦争の実相がリアルに迫りました。

舞台は第2次世界大戦中のソ連を舞台に故郷の村をドイツ軍に焼かれ、女性でありながら狙撃兵となった少女セラフィマを主人公に、戦争の悲惨さと理不尽さを描いています。

モスクワ近郊の農村に暮らす18歳の少女セラフィマの日常は、突然奪われます。ドイツ軍に故郷の村を襲われ、母親のエカチェリーナや村人たちが惨殺されます。セラフィマは赤軍の女性兵士イリーナに救われ、「戦いたいか死にたいか」と問われ戦うことを選びます。悲しみが怒りへ、そして殺意へ変わる過程に、戦争はこうして人を変えていくのかと衝撃を受けました。女性狙撃兵訓練校を卒業後イリーナを隊長に卒業生5名で狙撃隊（後に看護師ターニャ入隊）を組み激戦地を転戦します。女性戦士の扱われ方、戦時下に女性が受ける性被害も描かれ戦時性暴力への批判も込められていました。同じ村で将来は結婚するはずのミハイルが女性に乱暴している姿を見たセラフィマは戦争の本質を知った瞬間だったのではないかと思います。

イリーナの問いにどちらも嫌だと答えたターニャのような人が、ロシアでもウクライナでももっと増えてほしいと思う。

エピローグで、生き残ったセラフィマらの33年後の話が描かれていて、ウクライナの人々に平和をと願わずにはいられませんでした。（みな子）

Cinema Graffiti　〈私の映画評〉　シネマグラフィティ

少年バディの目線で
描く家族の物語
『ベルファスト』
樋口　みな子

札幌映画サークル会報
シネアスト
2022年6月号
掲載

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が2022年2月24日に始まりました。停戦どころかたくさんの子どもや市民が、砲弾だけでなく非道な虐殺で亡くなっています。ニュースで報じられるたびに、怒りと悲しさで胸が締め付けられました。私はこの映画をウクライナへの侵攻が激化しているときに観ました。

ケネス・ブラナー脚本・監督の幼少期を投影した自伝的作品です。舞台は、北アイルランド・ベルファスト。9歳のバディの目線を通し、時代に翻弄され様変わりしていく故郷の厳しい現実と、家族と共にそこで過ごした愛と笑顔と興奮に満ちた日々を力強いモノクロ映像で描きました。

プロテスタントとカトリックが反目し合い、98年の和平合意に至るまでに約3600人の死者を出した「北アイルランド紛争」をこの映画で初めて知りました。平和に生きるためにキリスト教はあると信じていた私は信じがたく、ショックでした。

冒頭の現在のベルファストのカラー映像から1969年8月15日のベルファストに転換。導入から何が起きたのか？と目を見張りました。路地で楽しく遊んでいたバディ（ジュード・ヒル）の目の前では、プロテスタントの過激なグループが街を襲い、眼前で火炎瓶が炸裂します。建物のガラスが割られ、バリケードまで築かれます。バディ一家はプロテスタントでしたが、バディの母は必死に子どもたちを守ります。ロシアのウクライナへの侵攻と重なりました。

昨日まで宗派が違っても、隣人通しで助け合ってきたのに、バディは戦場に投げ込まれたような恐怖を体験します。宗教をめぐる対立が激化し、一家の生活も変わらざるを得ないのです。両親と兄、祖父母と過ごすかけがえのない時間にはユーモアもたっぷり。ベルファスト出身のシンガー、ヴァン・モリソンの力強い歌も効果的に盛り込まれ、少年の心に刻まれた世界が生き生きと描かれます。

バディの澄んだ目が、多くの死者を出した紛争の愚かしさを見つめるのです。バディ演じるジュードの自然で豊かな表現が素晴らしい。

一家で『チキチキ・バンバン』（1968）や『恐竜100万年』（1966）を見る場面や、音楽とダンスに興じる場面はカラー映像に変わり効果的。音楽や映画はいつの時代も人々を励ますことを実感しました。

家族の発する言葉も含蓄があり、名言です。バディの祖父（キアラン・ハインズ）が彼に自分に忠実であることを教えるとき「お前の言っていることが理解できないと言うなら、それは彼らがお前の言うことを聴いていないだけ」。「答えが一つなら戦争など起きない」と語る父（ジェイミー・ドーナン）は「私は私の家族が私と一緒にいてほしい」と「ベルファスト以外の土地はまったく知らない」と言って、生まれ育った街を離れることに消極的な母（カトリーナ・バルフ）を説得します。「子どもたちにこれまでよりもずっとマシなチャンスを与えることができる」と。歌と踊りのシーンはミュージカルの一場面のようで斬新。動乱のなか、「行きなさい、振り返るんじゃないよ」と言ってイングランドに移住するようにバディ一家の背中を押すのが祖母（ジュディ・デンチ）でした。家族の会話にあるユーモアと教えの優しい人間愛が素敵です。

ブラナー監督は「最初の爆発が起こった20秒後には、その社会がすっかり変わってしまったということに触れたかった。平和な社会が足元から揺るがされたんだ」と語っています。本編にはその時の感覚や緊張が貫かれています。

ブラナー監督はシェイクスピア俳優としても有名

です。ウクライナのゼレンスキー大統領は、英国議会演説でハムレットのセリフを引用しました。一般的に「生きるべきか死ぬべきか」と訳されますが、「運命に抗して闘うべきか、運命を甘受して服従すべきか」という意味だそうです。監督が描いたことが、生きるために祖国を離れたウクライナの人々の心情に重なります。分断に与しないバディ一家の温かさが胸に沁み、未来への希望に涙しました。

c2021 Focus Features, LLC.

演奏するレイラ

対立を乗り越える音楽の力に感動

クレッシェンド　音楽の架け橋

ドロール・ザハヴィ監督

世界的に著名な指揮者のスポルクは、紛争が続くパレスチナとイスラエルの若者たちで、オーケストラを編成し、平和を祈念するコンサートを開くというプロジェクトを引き受けます。

スポルクの楽団員募集は、公正を期すため音だけで選考しますが、合格者の大半がイスラエル側で、最初から不穏な空気です。パレスチナ人はイスラエルに行くのも検問所を通過しなければならず、大変です。難関を突破しても双方はいがみあい練習もままなりません。

スポルクはドイツ人でユダヤ人を迫害した両親を恥じてきたことを語ります。そしてお互いをきちんと見ることが大切だと、驚くような場面が展開されます。パレスチナ問題を果敢に取り上げ、平和への糸口を探します。対立を乗り越える音楽の力が素晴らしいです。音楽に国境はないとラベルの「ボレロ」に涙が止まりませんでした。

世界的指揮者のダニエル・バレンボイムが、米文学者のエドワード・サイードとともに1999年に設立し、イスラエルと、対立するアラブ諸国から集まった若者たちで結成された「ウェスト＝イースタン・ディバン管弦楽団」をモデルに描いた作品です。

より良い未来になってほしい願いが伝わる

カモン　カモン

マイク・ミルズ監督

ニューヨークでひとり生活する　ラジオジャーナリストのジョニーが、ある出来事を機に世話をすることになった、9歳の甥ジェシー（ウディ・ノーマン）の存在に戸惑い、衝突をしながらも真正面から向き合うことによって、新たな絆を見出していく様を描いたドラマです。

ミルズ監督自身を反映させたジョニーを演じるのはホアキン・フェニックス。子どもに振り回されるキャラクターを軽やかに演じて、アカデミー賞主演男優賞を受賞した『JOKER／ジョーカー』の狂気のイメージを180度覆しました。前作主演ジョーカーからは到底イメージできない心優しい中年のジョニーを演じたホアキンの本作での演技は圧巻です。ジョニーはアメリカ中の子どもたちにインタビューします。未来を担う子どもたちへの希望を感じさせます。取材にジェシーを連れて行き、ぎこちないながらも少しずつ距離を縮めていく過程が良かったです。ティーンエイジャーとジョニーの対話部分はドキュメンタリーになっていて、大人とは全く異なる感性を持つ彼らの言葉の一つ一つが、胸に響きます。自分もそんな日があったなとハッとさせられるのです。「人類はいなくなる」と不安をつぶやく子どもたちに、より良い未来になってほしいと願う監督の思いが伝わります。

前へ前へとつぶやくジェシーのセリフは、私自身が言われたようで励まされました。

ヤス、おまえは海になれ

とんび

瀬々敬久監督

ヤスさんが愛妻を不慮の事故で亡くした時、息子のアキラは3歳。。阿部寛の不器用な父親役がはまり役。成長したアキラを北村匠海が演じました。ヤスさんを支えたのが、ヤスさんが住む瀬戸内海に面した「備後市」に住む町の仲間たち。彼らはヤスさんを温かく見守りながら、アキラを家族のように育てていく人情に胸が熱くなりました。

ヤスさんの幼馴染の父親の和尚さんから、「ヤスよ、海になれ」と諭されます。「アキラに寂しい思いをさせるな。アキラの悲しさを呑み込む海になれ」と。

ヤスさんの姉のような存在で小料理店のたえ子（薬師丸ひろ子）が「山あり谷ありのほうが、人生の景色が綺麗なんよ」と語る備後地方の方言の温かみがとても良かったです。私は「セーラー服と機関銃」で主演した頃からのファンです。

重松清の原作も読みました。あとがきに「正しさではなく愚かしさで愛される人であってほしい。強さではなく熱さで我が子を愛し抜くひとであってほしい。ヤスさんという父親が物語の中に生まれた」と書きました。

東京の大学に旅立った時も「卒業して一人前になるまで帰って来るな！」と悪態をつくのです。父の寂しさが胸に迫りぼろ泣きしました。アキラは背中に手をあててくれた父や、父の友人たちの手のひらの温かさを覚えていました。原作の良さを丁寧に掬い取っていて感動を二度味わいました。

購読料と寄付をありがとうございます（敬称略）
3,4～6,3

藤田春美　宮本紀子　荒井正人　中村秀子　高橋儁（切手も）
岸裕子　亀田法子　仲俣善雄　鶴田昌嘉　藤田とし子
阿保亘　佐竹政治　小池修正　佐藤正人　小宮山あい子
木村玲子　篠原節　内田由貴子　鈴木えり子　佐々木睦子
田中雄二　宮原光恵　合計108,000円は印刷と送料に使わせていただきます。「気候民主主義」を著者の三上直之さんから「教育鼎談」をミツイパブリッシングからいただきました。大切に読ませていただきます。「銀河通信」02740-7-56535
年間2,000円です。振込手数料が値上げしました。ATMで通帳かカードで入金すると手数料は152円です。ゆうちょカードをご利用ください。